第五章　朝鮮事變

一、明治十五年の變

明治十五年七月二十三日の夜朝鮮の軍隊叛亂を起し、王妃閔氏の一族を襲ひ、また政府の陸軍教官たりしわが歩兵中尉堀本禮造を殺し、更にわが公使館を襲撃して火を放つた。

こゝにおいてわが政府は、花房公使をして韓國政府に對し、嚴重なる談判を行はしむることゝなり、わが艦隊から一大隊を公使護衛として韓國へ派遣を命ぜられた。そこで第二大隊は第三大隊の一部を併せて臨時一大隊を編成し、八月七日小倉出發下の關に至り花房公使と共に乘船し、同月十三日濟物浦に上陸、ついで公使を護衛して歩武堂々京城に入り、爾後同地に滯在して談判の進行を援け同國政府がわが要求全部を容認して、濟物浦條約成るに及び第四中隊を公使館護衛として京城に残置し、餘の諸隊は九月二十四日屯營に選つた。同中隊亦十月公使館護衛の任を他隊に讓つて同月二十五日屯營に歸還した。

0635

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

甲申の變　しかるに爾後朝鮮の政界には、日本に親和して開國説を主張する金玉均ら、清國に頼り鎖國を唱へる事大黨との禍根が絶えず、つひに十七年十二月四日、京城郵便局開設式の日、金玉均の首領金玉均等事を挙げ事大黨の首領閔泳翊を傷ひ、更に王宮に侵入して閔氏外戚名を斬殺して、その政府を倒し、翌朝國王を擁して新政府を組織し、わが竹添公使は同政府の懇請により、護衛中隊（歩兵第四聯隊第一大隊第二中隊）を率ゐて王宮を警衛した。

しかるに事大黨は同國駐屯の清兵に來援を求め、清國公使袁世凱は約二千の兵を指揮して王城を圍んだので、こゝに日清兵はつひに銃火を交ふるに至つたが、わが軍奮戰して清兵をして一歩も宮門に入れしめなかつた。ついで清兵は暴徒とゝもに、泥碼のわが留守兵營を襲ひ、ついでわが公使館に迫つたのでやむなく一時公使館を濟物浦に移すに至つた。これ卽ち甲申の變である。

聯隊の渡鮮　こゝにおいて帝國政府は、外務卿井上馨を特派全權大使として朝鮮に派遣し、その善後行を問責せしむることゝなり全權護衛の大命は、再びわが聯隊に下つたのである。

そこで友田聯隊長は、直ちに一部の總成替を行ひ、第一・第三大隊を率ゐて卽日屯營出發、下の關

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

に到つて高島中將の隷下に入り、十二月二十七日同港拔錨、大使一行とゝもに仁川に上陸し、大使を護衛して京城に入つた。當時優勢なる清兵は、尙ほ京城附近に駐屯してゐたが、わが堂々たる軍容を望んで敢へて輕々しく動かず、井上大使は充分强硬なる談判をして、つひに京城條約の成立を見るに至つたのである。

翌十八年一月十六日第一大隊を公使館護衛のため殘置し、聯隊本部および第三大隊は京城を引き揚げて歸營した。かくてこの事件は落着したが、元來今回の事變は清國の敎唆に出たものであつたから更に伊藤博文を清國に派し、李鴻章と天津に會して、謂はゆる天津條約を締結せしめた。右條約の結果、『日清兩國共に守兵を朝鮮より撤退すること』となつたので第一大隊も遂次屯營に歸還したのである。

0637

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp